

武家名目抄

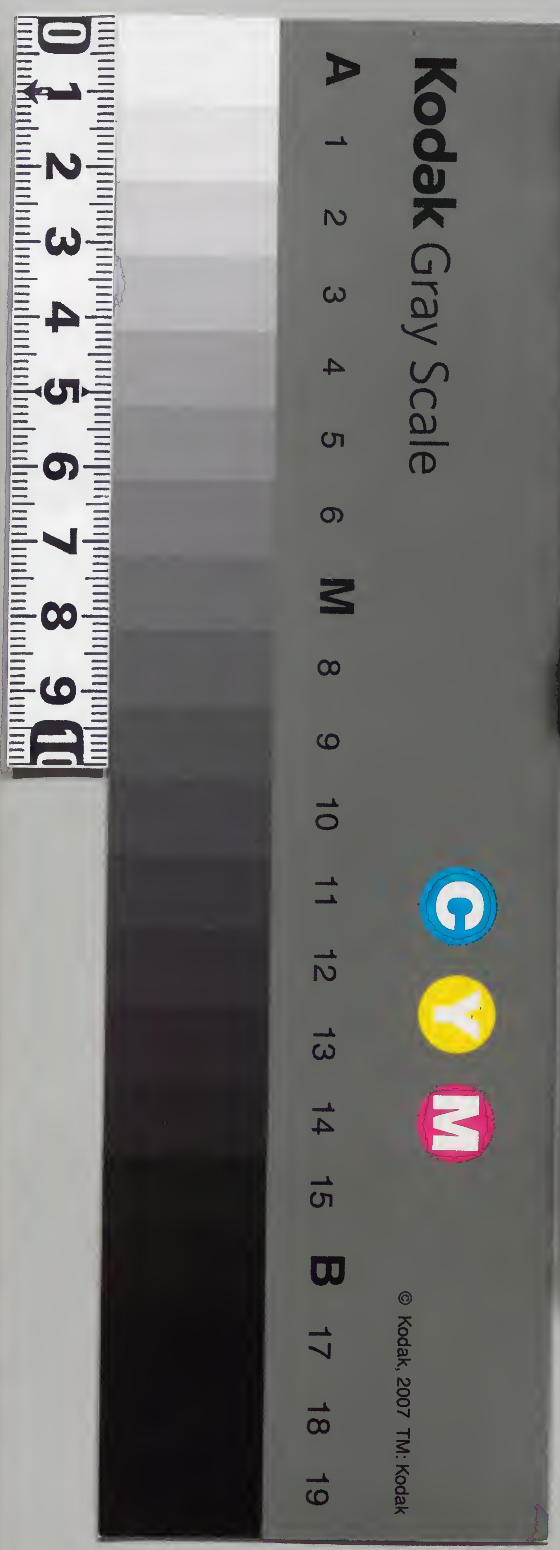
職名部十二下

第廿四冊

庚

共六十

内閣文庫	
和書類	三六〇九一號
六〇冊	一五三函二四五架
内閣文庫	
番號	和 36091
冊數	60 (24)
函號	153 276



276

本奉行

證人奉行

越訴奉行

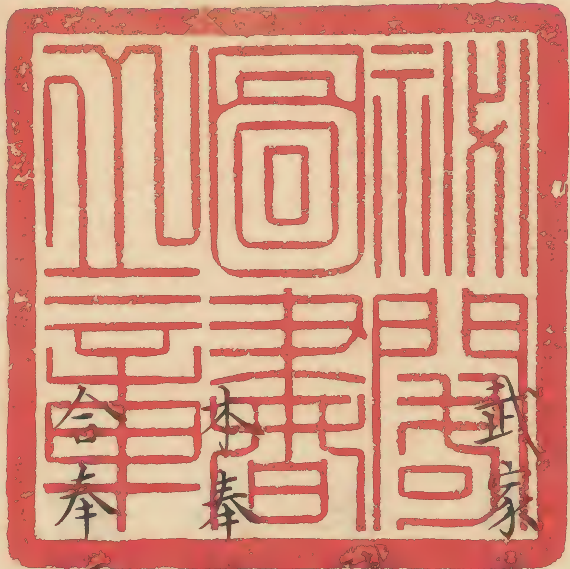
又稱越訴頭

合奉行

橫奉行

京下奉行

又稱京下執筆



武家名目抄第廿四冊

職名部十二下

本奉行

合奉行



貞永式目云閣本奉行更付別人更付別人企訴訟事右

閣本奉行更付別人内企訴訟事右

沙汰不慮而出来能仍於訴人者暫可被押裁許至

執中人有可為法禁制者仍人若令緩怠空經廿七日者

於庭中可下之

同追加云法西為宗神領事甲乙人等稱法却
質券之地撰管領之由有之聞為明石氏部去吏行宗長田左衛門尉
被逐付所為也明石氏部去吏行宗長田左衛門尉
教經多摩助三郎政行也大友多摩頭賴泰
法師越前守盛宗太宰少貳經資法師可為
合身行 按行宗以下三人也
六波羅の身行あり
太田康有記云建治三年八月十九日自山

内殿被召之間馳参之處召涉前被何云山
名次郎太郎直原飯泉兵衛二郎祐光岩間
左衛門太郎行重可勤合身行役之由可召
何云く九月四日依召参山内殿之處被召
涉前任何以安富民部三郎入道島田七郎
齋藤七郎兵衛尉長田新左衛門尉 以上改
所公人
富来十郎 元合身行
之執筆 飯田三郎左衛門入道
注入引付衆了六日五番執筆合身行文名

付城務十二月十四日豊後新左衛門尉被

召加于合身行之由為城務身被仰下

新式目云庭中事弘安七五廿七詳被召先事書并

本奉行尚日下有沙汰編人令尚系了陳尸之

由者可寄安石欵

又云城務事永仁五三六右自今以後了傳止之但有

詳定令為居内於好殘事者本奉行人可

申沙汰按以上五條ハ福倉
將軍家の事あり

建武年間記云奥州引付一番信濃入道長

井左衛門大夫真宗近江二郎左衛門入道安

威左衛門入道五大院兵衛太郎安威彌太

郎搵原七郎入道合奉二番三河前司常陸

前司伊賀左衛門二郎薩摩掃部大夫入道

肥前法橋丹後四郎豊前孫五郎合奉三番

山城左衛門大夫伊達左近藏人武石二郎

左衛門尉安威左衛門尉下山修理亮飯尾

次郎齋藤五郎

合奉行 ○按以一條と建武一統の時征夷府に准して藤子府に並べし

新司として大將軍
顯家忠佐職あり

鹿苑院殿御元服記云御祝儀式次第應安元年

四月朔日云々奉行攝津掃部頭能直松田左衛

門尉貞秀齋藤太郎左衛門尉利治按能直ハ
熱手行

利治ハ合
手あり

花營三代記云應安五年十一月廿二日將

軍家御判始御装束立烏帽子
長絹直垂執權武蔵守

頼之朝臣惣奉行治部少輔高秀右筆松田

左衛門尉貞秀合奉行齋藤四郎右衛門基

兼中其後於内々御祝雜掌管領沙汰之自

御所惣奉行并右筆合奉行下賜御馬按了小
右筆と

あふハ中判始
奉行あり

光源院殿御元服記云天文十五年十二月

十九日壬寅於坂本樹下宅公方御元服惣

奉行攝津守元造朝臣御元服奉行松田丹

後守晴秀飯尾大和守堯連御元服奉行兩人何七帷子也

按堯連公名仍多已上三條公且利
將軍此規式より多きものあり

建内記云嘉吉元年四月五日辛未武家兩奉行書下未到之由定光坊申之仍示遣大

和守許書下到來貞連即書之載判合奉行

松田九郎左衛門尉貞寬本名貞親也改名欽合判事示

遣之次遣定光坊畢其後定光坊下行也

康富記云嘉吉二年十一月廿九日丙辰向

布施民部大夫貞基亭西京隼人町事去年

十二月及兩度致披露重又可有披露之由

令催促了相奉行飯尾肥州禪也兼可申之

由返答按貞基ハ其祈
認の本を仍り

季瓊日録云長祿三年十二月廿日依馬淵

被官人永原公事可有御紉明之相奉行

之飯尾加賀守伺之以飯尾左衛門大夫被

相漆之由被仰出也

又云寬正五年三月十七日當院領江州安
孫子鄉二階堂山城守知行江州立保鄉民
等就用水之事及弓矢合戰仍可有御成敗
之事并京極鞍智又次郎高夏知行同所也
仍以訴狀申之當院奉行飯尾左衛門大夫
鞍智方奉行清和泉守出御奉書可致成敗
之由被仰出即召兩奉行雜掌命之
按飯尾ハ
本奉行
清八合寺
仍多子

政所内評定記錄云寬正二年九月六日内
談披露條々一六波羅岩坊飯兵與平野神
主齋四相論事番之中已上七ヶ條同廿六
同内談一番勸修寺家治河與塚崎齋四間事
一番矢倉兵庫治河與八幡入江坊飯左間事
一番三位篤忠將諏左與今熊野牛枕庵齋四
間事以上三ヶ條十二月十七日昨日一番
中井次郎三郎諏信與雲田齋四間事一番

勸修寺家河治與東崎齋四間事一番賀茂氏

人等將諏左與森河齋四間事一番正親正申

間事將諏左以上四ヶ條按前人を頼るに本意あり論人を頼るに本意あり

又云寬正四年四月十五日內談開闔飯左大依歡樂

俄不披露一武田被官與一色左京北被官

相論舟荷物事於舟者盜物沽却云々召上

彼詐論人可被遂對決至荷物者彼船頭負

物在之間押取云々所詮船之荷船頭之計

哉否自餘之津湊例相尋之可依左右本奉

行清泉合奉行治河一對決四月廿一日如內談

兼日證人奉行事以公人相觸略中武田奉行

清泉一色殿奉行治河申詞執筆齋五兵銘

齋四右奉行衆寢殿著座一色殿御使小倉

武田使逸見其外武田被官莊江次間座船

頭兩人廣縁座一內談四月廿六日披露一武田

被官與一色左京北被官若州小濱住人等

買賣船相論事賣主有現在者不日被召上
可有糾決云々本奉行清泉合奉行治河六
月二十六日內談一北野祠官兼真院申間
事召文雖及兩三度田中越前守無音被成
後悔召文可隨左右本奉行諏信州合奉行
治河一武田被官與一色左京北被官申船
荷物事十三九船大事者主各別之上者於小
濱立請人先被返渡相論技舟事者仰豐前

廿四之七

守護可被召上賣主本奉行清泉合奉行治
河

齋藤親基記云文正元年八月廿二日飛鳥井家
被官人与右系北被官岡相論粟田口酒屋事
於殿中意見在々本奉行兵大負有合肥州
之種

政所賦銘引自云淺原與三部秀廣文明十五十
五信泉州
口條坊門南西類新宅事河上孫三郎仁借益作

到彼方より料は一貫文借用修造寺志返并
修处件在之質物之入之由P捺于今抄留以云々
合寺仍飯加州 為信同 飯加 清房同十三年九月十二
○按本寺仍清泉州
合寺仍飯尾為信あり之在後
合寺仍を清房うけ給り之在
又云抄年修理亮親長 文明十三九 合寺仍抄卷 十
十日中掃大
西院小永彦沙汰人職并給田之之任文明十二
八廿三永代沽券 明之肯可被成下安堵所書
云々但論人道幸入及也可有之明

又云存卷修理亮親兼 文的十日三廿六中 海中
掃大与奪飯加九廿七
高賣紙府事先祖相傳字之隱然件支院其一條
乃場玉壽庵入之質物之處彼庵ヨリ村上在亮
預之條係失之由玉壽庵現狀有之然下京
橋卷与P者今出帶件支院中給所奉書之候
无是非以可預清紀明云々合寺仍布
野州同五月三日合清式大之与奪又其在中
子細諏信之与奪

大館常興記云天文十年十月十日号徳院（和興）

安居院（和興）相編事はふしの披露を号徳院

徳利云（按）已上九條ハ京於將軍の時

甲陽軍鑑云（全）九年三郎為（落）合共助（長）坂源五郎（落）合共助

或おを付く（中）極ハは度（中）方以是不（中）ハハふ（中）ふ

ま（中）き事（中）ふ（中）れ（中）在（中）全（中）九（中）年（中）三（中）郎（中）う（中）殊（中）外（中）由（中）成（中）を（中）

あ（中）く（中）中（中）上（中）ふ（中）於（中）友（中）か（中）く（中）の（中）分（中）なり（中）と（中）極（中）く（中）共（中）助（中）は

中（中）さ（中）う（中）う（中）十（中）う（中）意（中）趣（中）を（中）共（中）助（中）う（中）公（中）事（中）此（中）前（中）小（中）長（中）坂

源五郎横を仍れ書ふお南の時公事此極子悉源五郎

言上仕る付ふお仍れ流下上極子（中）とて（中）由（中）氣（中）頭（中）五（中）郎

是ハ源五郎ハ別お透取なりとて（中）れ（中）ハ（中）不（中）を（中）仍（中）若（中）き

流一人はく悉これハ曲測の極ある者ありて仍ハ

難言の時を仍れとて相言は言上中ハ片口を以て

曲事ハハ成よ（中）き（中）り（中）とて（中）由（中）度（中）ハ（中）留（中）為（中）す（中）横（中）を（中）仍（中）

代をさふ横を仍れハ何（中）も（中）不（中）中（中）上（中）よ（中）き（中）物（中）を（中）源（中）を（中）仍（中）

利殺をを以て（中）を（中）仍（中）流と押のけ我志て持多る

例とふりておつゝ職名はかくぬりしふに 不奉行を常

設きさうし、誰しもあれ引をなす者、但許詔沙汰の

外よりあらうて定をくらふをば、必し例に准き

るれ大小は従て人数の多さもつゞ又門地階級も

かゞひして命をくらふれしなり 本條より引る身取

外に社領沙汰の爲しは、武月進加は詔西

一統の新制にて、又建武

成敗と沙汰をとり、又建武

以て合をばり定並れり、隠倉は

例に准きしふふなり は時をふりて、
引身取の下篇を用ゐられしなり

是利殿の時よ玉りて、設並をばり

皆臨時に命をくらふ格とふまじ、且舊次階級

とてえりて、とて

るりて、又皆

あつて 但由評定始由沙汰始等よ、
方ふ加し、
勤仕は、
能く、
他のをばり、
公りを授け、
又は、
時をばり、
ひし、
なり

政新内法の時詔以下志

合奉行の辨人を何つり合奉行の辨人を置く

是亦儀念此例と異なる所あり 思ふはあまの
の階級ふり

しとあは
故ありし 凡室町此奉行の辨証沙汰の如く此

規式の上を定めしるも合奉行の辨あり

いふか不評判始は元服等此如き然る處に

公事ふとせ當に奉行一人を命じ更

合奉行一人を副らるる規式よつきる職掌

但大儀の許定流を以て
水子 二人を副られ小奉行一人を副職のふき

事しつ又儀念此奉行一人を副らるる規式あり
奉行せしむる如きことあり此証沙汰の外は
合奉行志願聞えさふの如き思ふは辨証
はして常日合奉行志願あるあり他事
を称ふりし よとあま 之解何事おとせ奉行を定め

らふつさ時と大に合奉行を副らるる事

ふり後大名諸家も此職を以てしるは合

幕府に割ふるは 合奉行或は
お奉行は作る

そのあふと合相共よお對せる
とありて訓義近きうなり

證人奉行

政所賦銘引身云對決回文折明日刻
於政所一一一与一一一算用對決為鏡人
事乃有系勒之由作一一一殿為人但依事
三人也以公人相觸之有人者一人鏡人殘算用者
沛倉為所ヨリ算是二人召出之正合算也以
公人召之

政所内評定記録云寛正四年四月十五日内談
中披露一武田披露与一公左京兆被官相觸舟
略

荷物事於舟去盜物法却之召上彼訴論人
了遂對決云々奉行清泉合奉行治河
一加賀國那谷寺福苑坊買得之地事本主
立由彼地已前之法却狀謀書之由中疑書事
以公人奉行令檢知之可依左右本奉行齊口右
一對決日月廿如内孩急日證人奉行事以公人
相觸回文書模例式折明日廿年刻於政所
武田大膳大夫被官与一公左京兆被官負物相觸

對決為院人奉行可有系勒之由以月日社後
即志馬門尉殿齋藤六郎左衛門尉殿武田奉行清泉
一及殿奉行治河申詞執筆齋五名銘號曰右
按この對決は院人奉行多者
執筆後と銘號とを以てなり

又云十一月廿六日内該下野小商人寶成若物

飯五 十二月廿二日對決森次郎齋四小右衛門 隱

商人寶成代 證人奉行治河清泉右筆齋五兵

也飯左大 卷川親元記云寬正六年六月廿八日甲辰松梅院

禪親与勝花坊胤禪對決於布施下野寺真基所
在之禪親奉行布野州胤禪奉行飯左大社家奉行也
證人奉行諏信州治河右筆齋四右

按院人奉行ハ糧倉殿の時不見る事多ク
此ハめて室町家の學不設りて職号と云也
より臨時に所職として常日設る事少
あり以何れも所是稱福人等對決は
事あるは本奉行合奉行の外交其他の奉行

二人もくハ三人として沙汰始末見聞
せし心持人等といふ事即ち好まらざる
職分且ハ対決乃是非曲直を以て之れ一且之
事尚の事行ハ偏頗ある旨を證しつゝさ
る事ハ之れを以て之れ人を以て名とせしなり
後念の事
は之れを以て之れ人を以て名とせしなり
は之れを以て之れ人を以て名とせしなり
奉行とて之れを以て之れ人を以て名とせしなり

横奉行

甲陽軍鑑云

落合吉助と百
姓と公事條

曲淵水鏡の記して奉行

此ハ意外の後沙書立をたされおくを習流の内にて
其人横奉行と名付の事持場ハ一人は之れを奉り
一由奉れば其の事ハ一人ハ一由奉る今九筑前守子
平之郎二番小長坂守因子源五郎三番小日向大和
子孫九郎四番小三枝去佐守子若八郎五番小美田
一徳齋子源五郎是ハ人也然レハ曲淵云々此
阿久野日小由金才道遠軒被官落合吉助と云者
百姓と云事を仕負ふ奉行を以て之れを以て之れ

在りハ金九平三郎也五人の中より一人は家より
落合ノ雜言の根子に於る信玄公聞合公事此次亦ハ
何と云ふ得ある事三郎に於る後ハ奉行所ハ可
得信公家等々只雜言に於る計に於る信玄公中合當家
法度の式目紙別存し予しと云ふこと系列ありとて
彼平三郎を由儀員ありそ存す所をせりて善助
仕る事紙妻中合に遊する也次ノ横目の廿人
改を以て善助隠密御りつて由りて善助は
改を以て善助隠密御りつて由りて善助は

上り由り上る又少人改流を免して三郎にて善助は
唱流のふりてと善助遊公事ト記す
又云 金九平三郎為 長坂源六郎落合善助と
落合善助は成候 是れを以て善助と云ふ事あり
形は金九平三郎に殊外由成を以てくす
ありはふなりと換く善助に於る事あり
善助の事ありは長坂源六郎横を以ての善
お高る時由花の前より善助の事ありは善助と云ふ事あり

言上はうふ竹宗不孝の元平と稱せしめて此節と
其互是古源の良分別を遠に及びるはくこのりハ
本奉行若き元一人のけうこそこれハ曲測の積ある
者ありて不孝ハ難之れ時を待たざるもあはれ之と
中ノりこそをりつて曲事とこそあされよき事にて
源平のり為る横を待たつとこそされ横奉行元々
何れも不孝とよりは西成源の節利をたそをいし
孝行元成をいのも我志をもちたる積子位を公成とふ

一向不孝は一人名人なる西成形にてこそ是ふ竹宗
指並のひきき後不孝の元をたて公成の積子
けこそ成就中い責助う公事ハ源の節横を待の時
積指次ノあり可ふ平三郎おひぬ横積あることり
平三郎を一人積長たさうふ付て源の節う平三郎を
秘多うと責助をいし讒言は云々
のころは
いころは

按横奉行ハ甲州のころけりさ地家ノ控てさく

所なりしを此職ハ訴訟沙汰の時上事を以て
侍ありてその曲直を察しりし法令に如く
るり阿まはるる旨を主將小密告せる職掌に
室町殿の控人より頼あり横ハ侍はさるる同所
職を横目としり不同し尚世目附の職多る者を
訴訟裁判の席に依りしむるは横を以て
職掌にむとす

越訴奉行 又稱越訴頭

北條記云文永元年十月廿五日越訴頭實
時泰盛

關東評定傳云文永元年甲子評定衆越後

守平實時 三番引付頭 六月為二番頭 秋田

城介藤原泰盛 六月廿五日為三番引付頭 十四年

丁卯評定衆越後守平實時 越訴奉行 四月

秋田城介藤原泰盛 越訴奉行 四月

新式目云弘安七五廿八箇條一越訴奉行

可被定奉行人事 按は時奉行人を置るべき儀あり
といへども永仁元年より数年の間
其人を補せり
しやええり

北條記云永仁元年五月廿日越訴頭宗宣

宗秀十月止引付置執奏時村道鑒師時惠

日宗宣蓮瑜宗秀等也 按宗秀ハ大江廣元の子孫
長井宮内大輔なり宗宣

の事ハ次
りあり

又云宗宣弘安十年十月為評定衆正應元

年十月七日任上野介永仁元年五月為越

訴奉行同七月為小侍奉行同十月止引付

執奏諸人訴訟同四年正月為引付頭番同

十月為寄合衆同為京下奉行

新式目云越訴事 永仁ハ
三六 右自今以後停止

之但有御定令居内於御殘事云云其人

可申沙汰

北條記云永仁五年三月六日評云被止越

訴但本訴事一箇度被許之九月廿九日評

定逢懸越訴事為奉行人出仕引付可沙汰
之由被仰出之六年二月廿八日評云越訴
被許之但宗宣宗秀事切事者不及沙汰質
券賣買利錢出舉向後被許之按邊懸越訴事
とら今年越訴を
止せらるゝといふも當時いふ
裁判決せり系越訴はしるる

又云永仁六年二月越訴頭道嚴行藤替蓮
瑜○

按蓮瑜ハ字於宮下野ヲ景徳入乃ナリ去奉以來其人
トテト申セシトモ此れ越訴のトクナリト云フ

又云道嚴攝津入道
俗名親致弘安元年二月加評定

廿四之廿

衆永仁四年為安堵奉行同六年二月二十
八日為越訴奉行正安元年正月六日加奏
事人數乾元元年九月十一日為八番引付

頭

又云行藤永仁元年十月十九日政所執事
補之正應

元年七月廿四日任出羽守永仁六年二月
廿八日為越訴奉行正安元年四月一日為

五番引付頭

又云正安二年十月九日止越訴相州家人
五人奉行之

又云宗方正安二年十二月廿八日為評定
衆同三年正月廿日為引付頭番四同八月廿

日任駿河守同廿五日為越訴頭嘉元二年
十二月七日為侍所

又云乾元元年越訴頭宗秀

又云宗宣正安三年九月任陸奥守乾元元

年二月十八日為一番引付頭同八月為官
途奉行嘉元元年八月廿七日復為越訴奉
行同三年七月廿二日為將軍家連署

諏訪大明神畫詞云嘉元此頃尚國の由家人
小坂孫三郎盛重三科有一硫黄三嶋一流
さきありける三尚社一社一の一海一室一乃一以一役一人一を一
先規小任せて免除有一由一愁一さ一申一され一と一と
至頃執權時村胡臣を越訴爰以宗方確論の事

乃て神訴もそりり同三年四月關東多礼あり
時村胡長次ハ勇士等やあやまりて殊戮一平
宗方凶害とそ軍を統了終了一向を經て
宗方又殊に休末代ふりといふも神罰不思義あり
とて同八月早船を立ちまて石返され早
清原氏系圖云親監隼人正刑部大輔正五
下評定衆越訴頭

二階堂系圖云時藤備中守安堵越訴時藤

弟貞藤出羽守越訴

按己上十七條ハ總念
將軍宗北幸行也

庭訓往來云寺社訴訟志就本訴奉達被是非

越訴覆勘依探題管領與奪被執行按中
文志

表ハふゆての事ハ人越訴を覆勘するハ越訴
奉行ハ與奪を受て後沙汰する哉以ふ可也

樵談治要云奉仍人として顯負致して

うちふふされたる公事

こむりそれ咎あふ座うひそむれ幸仍る人

侍事しりしれ媚を好して理をゆらん返く口惜

かゝる一由法よとを以てさしおきて別人よを以て
訴を以て以て事以て存止せらるるといふも時を
志すといふもよとていふも内奏強縁をりて
ふきさし中なるなりなりなり
按一一条八宝町
家のなりなり
鎌倉大寺紙云慈永五年十月日氏満早二采よ由遊玄
妙中畧よ若満急公鎌倉よ侍りのふ爰候ハ上杉中勢
禪師承之引舟以人二階堂野州入乃法春一方以人
長井掃部入乃道供禪律奉行町野信濃守

入乃淨善越訴之奉行二階堂山城宮内入道
行康等也
按一一条八宝町
是利家此を以たり

● 按越訴奉行ハ本奉行此沙汰或ハ逆滞一或ハ
偏頗の事何ふ時訴以人越訴を以て以てきふ
殺られ一法うさふして偏よを以人等此私曲
緩急以防くるに職掌ふれと鎌倉殿の初政
よハ是れ一これ一此一此並當時の法を以て皆職よ
うるハふりなりや、衰政の時よ以て是れ

頭人（ついでに）の（し）を（き）と（し）の（り）

京下奉行 又稱京下執筆

北條記云宗宣正應元年十月七日任上野

介永仁四年正月為引付頭同十月為寄合

衆同為京下奉行同五年七月十日為六波

羅南方

又云時連永仁四年為寺社奉行同六年十

二月廿八日任信濃守正安元年為京下執

筆同二年為引付頭

又云熙時正安三年八月廿二日為評定衆

同廿五日為引付頭乾元元年十一月十八

日任右馬權頭嘉元三年為京下奉行德治

二年二月九日任武藏守延慶二年四月九

日為寄合衆

按京下奉行といふは鎌倉時代よりありて

永仁の頃あつた設けられたりといふ

重職ありしと云ふ事大なる小條家の門族
これ補きし多し但し職掌よりある事
いふも明説を得ざるは詳しき事なり
以てしるも當時の俗説より上洛のころに京上と
いひ京師とを地方へ赴くと京下といひし
よりて考ふるにいふ所を京師の官人訴訟に
事ふく下向するも又鎌倉より呼下し
たる所の訴訟を沙汰する所職ありし

畢竟官家の人々を昇格なく公家と志
事あると裁判の進捗なくん為し殊更
いふ所を設けしと云ふ事ありていふ所
永仁乃頃より起りて始りてを是れしと
思ふも近年奉行人等緩怠して公事れ
沙汰延引し及ぶ類多しなり
二年七月鎌倉より九州探取小條実政の方へ政勢
執事の制令と違ふ内より京下并々足利人及経
年序沙汰事急速可申沙汰する事なり
阿豆より京下とあるは西田より領色訴訟の事

新式目
は正安

小治政を謀るに下りしる友人をいふなり國ありて
朝よけを以て役もれん徳西へもいふ子達滞りたる
處に昔頃通せしなり永仁四年より正安二年までい
終へしふ年なりあまらぬ多しといふ大言を知へし
又あまを京下執筆ともいふいふなるを身代人を
右筆方ともいふなり

武家名目抄第廿四冊

源忠常書

